

禪僧は一生不離叢林といふ、軍人は一生不離軍隊の精神がなくてはならぬ、乃木將軍は實に二六時中須叟の間も軍人の本分を忘れぬ人であつた。

### 加藤清正と千の利休

茶道の祖、千の利休は參禪して一隻眼を開いた人であつた、加藤清正は近頃豊太閤が園基や茶道に耽つて天下のことを忽諸にするのは利休あるが爲である、此奴一番亡きものにしてくれんと或日さり氣なく利休を訪れた、利休は一目見て清正の面上殺氣の漲れるを知つたが、さり氣なく茶室へ案内した、清正が茶室に入らうとした時、利休が「茶室には大小は無用でござる、それは愚老がお預り致さう」といふと清正は「大小は武士の魂である、輕々しく他人に托すべきものではない」と云つて其の儘茶室へ通つた、利休は靜かに爐邊に坐して茶を點して居る、清正は隙もあらば一刀の下に切つて捨てんと窺つて居るけれども寸分の隙もなく、利休の手に持つものは茶椀でも柄杓でも皆武器の様に見えるので呆氣に取られて居ると利休は煮

え立つた湯を熾におこつた火に浴せた、廣からぬ茶室は一面に濛々たる灰神樂で目も鼻も灰だらけになつた、清正は突然のことに驚いて狼狽して庭前へ飛び出したが、利休は從容として灰を拂ひながら

「ア、珍客を請しながら愚老一代の失策を演じました、何卒御免し下され、時に貴殿の大小が斯様に灰だらけになつて居ります、武士の魂とやら申す此の大小、利休めが取り上げて灰を拂ひ申しても差支ござらぬか」といつた、流石剛毅の清正も之には返す語もなかつたといふ。

### 塙保己一の月見

塙保己一は盲人の大學者で、夜書を講じて居つた時、燈が風の爲に消えて一座の者が狼狽するのを見て

「サテ、目開きは不自由なものぢや」といつたことは有名な話である、塙檢校が或年明月の夜に月見の筵に列して

花ならばさぐりても見ん今日の月

と詠じた、花ならばさぐりても大方の様子を想像することが出来るけれども、盲人の悲しさ、月ばかりは如何ともすることは出来ぬと嘆いたのである、目開を挿した氣概に比しては餘りに女々しい様ではあるけれども目開をして後に瞠着たらしむる如き氣概ある人にも、一面にかゝる悲哀のあるは又免かれぬ人情の自然である、或時は盲ひたる幸福を喜び、或時は其の不幸を悲しむ、而かも悲んで傷れず、喜んで規を逸せぬ境、檢校の如きは遠かに修養の効あるものといふべきである、檢校の明月の句を聞いた妻は、いたく夫の心根を悲しんで、これも

明月は座頭の妻の泣く夜かな

と詠じたといふ、人は皆あの清らかな月の光を仰いで興がつて居るのに、わが夫ばかりは之を見る事が出来ぬとはなんぼう憂きことぞと、明月の夜は座頭の妻に取つては却つて悲さの堪え難いものであると己が境遇を客観した句である、此の夫にして此の妻あり、誠に此の同情があつて始めて琴瑟相和するのである。

三人三色

臨濟義玄禪師がまだ黄檗希運禪師の會下にあつて修行して居つた頃のことであつた外の雲水共は例によつて作務の済んだ骨休めに、僧堂のそこ此處に寐をべつて、うたゝねをしたり雑談をして居つたが、臨濟は寸陰分陰も惜しいといふ様に、僧堂の前で只管に打座して大事を工夫して居つた、其處へ黄檗和尚が偶然來られたのを見ると臨濟は早速目を閉ぢた、黄檗は

「オ、怖い」

と如何にも怖るゝ様な風をして早々方丈に歸られた、臨濟は其の後からついて行つて慇懃に黄檗を禮拜して退いた、傍に黄檗山の第一座が居つたのを願て黄檗は

「どうぢや、アノ坊さんは年は若いが偉いものぢや、一大事因縁が悟れたと見えてあんなに禮拜して行き居つたわい」

とホク／＼喜んだ、第一座はそれを聞くと冷笑して

「方丈は近頃少々どうからせられたと見えてあの様な男を印可證明せられる、實に怪しからぬことぢや」

と抑へた、此の僧道がに黄檗山の首席を占める程あつて、佛を呵し祖を罵る底の大機大用を具して居る、黄檗は狼狽して、自分の口を押へて

「失策つた、こいつは老僧一期の不覺であつたわい」といふ、第一座は

「そう御氣が付けば結構です」

と如何にも黄檗をたしなめる様に應揚な態度でいつた。

此の一場の閑葛藤、果して第一座の勝利に歸したであらうか、否、這箇の公案に參するものは須らく臨濟の松、黄檗の竹、第一座の梅、とりぐに趣あることを知るべきである。

### 作麼生か開き難き門

承天嵩禪師が或朝方丈の門を開かうとしたが却々あかね、種々と工夫をして居る處へ一僧が出て来て

「石壁でも山河でも大解脱を得たもの、前には少しも阻碍とはならぬといふことでありまするが和尚には何故此の門が明けませぬか」

と、如何にも和尚も尙大解脱を得ざるかと咎める様な口ぶりで問ふた、承天和尙は此の僧解脱といふ繩に縛られて居るナと思つて

「石壁山河は開き易くても此の門の開き難い道理があるのぢや」

と無差別中差別あるを道破した。僧はまだ充分和尚の意を會することが出来なかつたと見えて、更に

「然らば開いた後はどうであります」

と大自在の境界を問ふた、和尚は

「是れは何ぢや、これは」

と何處をも示さずに反問せられた、是れとは何を指して居るであらうか、和尚自身か

僧か、我か他か、天地か有情か、否々、和尚は天地宇宙我他彼此を總て包括した或物を指して大解脱の當體を示されたのである。

黄檗禪師と裴相國

裴休、字は公美、唐代の國吏にして篤信の居士である、禪門では裴相國として知られて居る、圭峰宗密禪師と交つて深く華嚴の教義に通じて居つたが、後に黄檗に參じて佛知見を發得するに到つた、相國が始めて黄檗に謁したのはその大安精舍を訪ふた時であつた。

黄檗希運禪師は感ずる處あつて衆を捨て、黄檗山を去り、大安寺に入つて大衆に混じて殿堂の掃洒に任じて居つた、偶ま州の刺史となつて赴任した裴休が寺に參詣すると、鑑寺か出て來て挨拶した、裴相國は壁に描かれた畫像を見て鑑寺に問ふた。「これは何の圖でありますか」

舌頭に針を含んだ問であるけれども、此の鑑寺一向無眼子の漢であつたと見えて

「さる高僧の肖像であります」

と平凡な答をした、裴相國は果然

「肖像といふことは解つて居りますが何處に高僧が居りますか」

と裏んで居つた鋒鋒を露はして肉迫したが、鑑寺を始め一山の僧は盡く口扁擔の如くで一言も答へ得るものはない、そこで相國は語を改めて

「當山に禪僧らしい機略を具へた僧が居りまするか」

と問ふと、鑑寺の傍に居つた一僧が差出口をして

「居ります居ります、此の僧は何處やら一風異つた人物で、如何にも禪者らしい趣があります、召びませうか」

といふ、相國がそれでは一度遇つて見たいといふと早速其の僧が折柄相國の訪問等は始と眼中にない様にセツセと薪作務に従事して居つた黄檗和尚を相國の前へつれて來た、相國は一見して其の魁偉にして凡庸ならぬ容貌を見て、これ確かに具眼の衲僧に相違ないと思つたので、慇懃に問ふた。

「只今茲に居らるゝ方々にお尋ねをしたけれども答を吝んで提撕をして下さらぬ、願はくば貴僧某甲の爲に一轉語を示されよ」  
黄檗も又禮を厚うして之に應じた。

「潜越ながら拙僧に契ふことならばお答へ致しませう」  
そこで相國は前の問を繰り返した、黄檗はそれを聞くと

「相國」

と呼んだ、斐相國が何氣なく呼ばれるまゝに

「ハイ」

と應諾すると、黄檗は間に髪を容れず問ふた、

「高僧は何處に居りまするか」

よくよく脚下を照顧せよと促したのである、斐相國は言下に大悟徹底したとある處を見ると、己に碎啄相應する時機に達して居つたのである、人々各自皆一個の高僧であるのに、大安寺の鑑寺を始め一山のもの盡く新聞の消息を會せずして相國の問話

に遇つて徒らに左顧右眄するのみであつたのは笑止なことである、即今禪に參するもの、高僧の所在を失却することなくんば幸甚。

### 井の驢を見るが如し

風吹けば草木搖ぎ、水澄めば飛禽の姿を映す、現象界の一切萬有は互に相互作用すること響の聲に應じ、影の形に隨ふ様なものである、而かも風の草木を搖がすも無心、水の鳥影を映すも無爲であつて、其處に聊も愛憎恩怨の情なく、束縛もなく偏執もない。

曹山本寂禪師、嘗て徳尙庵といふものに問ふて曰く

「佛の眞法身は恰も虚空の様なるものである、一切時一切處に出沒隱顯自由自在である、又物に應じて形を現することは恰も水中の月の如くである、此の應ずる底の道理を何と説き示したものであらうか」

徳尙庵といふものも多年參し飽いた伶俐の漢であつたと見えて、其の答話は思量分

別を絶したものであつた。

「佛の眞法身の爲に應ずるのは、驢の井戸を覗く様なものでござる」  
驢が井戸を覗くのは別段井戸の深さを知らんが爲でもなく、又自が姿を水鏡せんが爲でもない、任運にして無功用、只井戸と驢と無心にして相對するに過ぎぬ、萬有の相交渉する、佛の眞法身の物に應ずる、又恰も是の如きものである、曹山和尚尙庵の答を聞いて更に

「尊公の答話は甚だ要領を得て居る、併し乍らまだ十分とはいはれぬ、所謂八成を得たに過ぎぬ」

と一寸抑へて尙庵の力量を試みた、追がの尙庵もウカと和尚の釣針に引掛つて

「それでは老和尚は何とお説きなさいまするか」

と反問した、驢の井を見るが如しといふも已に爲作造作に涉つて居る、曹山和尚の手許に於いては言語意路に涉るべきものはない、それを「あなたの御意見は」等と問ふのはまだ徳尙庵脱體無碍の境界に安住した人とはいはれぬ、機鋒の鋭い師家ならば

イキナリ三十棒を亂下するか、擒住して門外へ突き出したであらうけれども、綿密を旨とする洞山和尚の流を酌んだ、曹山和尚は

「井の驢を見るが如くぢや」

と懇ろに提撕せられた、井の驢を見るが如しも、驢の井を見るが如しも、文字の位置を轉倒したまで、別段異つた意味はないが、其處に又いふべからざる轉身の好味がある、佛身の活用を語を換へて示した所、謂所慈悲落草の談である。

### 空劫已前の自己

真歇清了禪師が嘗て丹霞子淳禪師の會下に參じて丹霞に面謁して其の提撕を蒙らうとした、丹霞は先づ

「吾々の本體は空劫已前から不動不變のものであるといふ、全體空劫已前の自己とはどんなものぢや」

と問ふた、空劫已前とは一口にいへば無始の始である、我等の本體は時間を超越した

存在である、無始の始めに存在して居つた眞實の自己とは抑もどの様なものぢやといふ難問である、丹霞の間に對して眞歇が何か答へ様とすると、丹霞はそれを制して「言つては駄目、言つては駄目、マア大衆と一しよに居て參究して見るが可い」といふた、超時間の自己に對して一言半句でも扱めば忽ち本分に墜過するから丹霞は眞歇の答話を抑へたのである。

或日眞歇清了和尚が鉢孟峰に登つて四方の景色を眺めて居る中に豁然として所謂空劫已前の自己に相見することが出来たので、徑に歸つて丹霞の前に立つた、一言も發せず、只默然として佇立したのを見て、丹霞はハタと横手を拍つて

「尊公愈本分の事に契當しなナ、そこぢや、其の無語にして立つた處に空劫已前の自己がチャンと姿を現はして居る」

と讚めた、「好いた同士は眼元で知れる」とやらいふ俗語があるが、眞歇と丹霞とは同じ境界に達した所謂同道唱和底の間柄であるから黙つて前に立つても互に意旨は充分相通することが出来たのである。

### 洛浦山の園頭

永安靜禪師は嘗て洛浦禪師の會下に居つて園頭の役を務めて居つた、庭師と木樵を兼ねた様な役である、洛浦の會下に居つた一僧が洛浦を辭して去らうとすると、洛浦は

「四面是れ山、闍黎甚の處に向つてか去る」

と問ふた、僧は斯様に問はれて一言半句も答へることが出来ないで只默然として居るので、洛浦は十日間猶豫を與へるから、其の間に何とか下語して見よ、其の下語にして我が意を得たならば尊公の去るに任せるといふた、それから以來僧は「四面是れ山闍黎甚の處に向つてか去る」といふ問題に就いて日夜參究したがどうしても適當な答話を得ることが出来ぬ、或時山林の中を歩いて居ると永安の靜和尚が恰と薪作務をして居るのに出會つた。

「上面辭し去つて今何ぞ此に在る」

貴僧は當山を辭し去つたと聞いたが、どうして此處へ來たのかと静和尚に尋ねられて、僧は洛浦山主との問答に窮して居る譯を話して、尊兄何とか巧い文句を教へてくれぬかと頼んだ、昔も今も同じで、多くの中には斯様な無眼子の漢が少くない、静和尚は

「竹密にして豈流水の過ぐるを妨げんや、山高うして那ぞ野雪の飛ぶことを阻てん」

といふ一轉語を教へた、此の僧早速それを暗誦して行つて洛浦の前で誦み上げた處が洛浦は忽ち僧の手許を看破して「此の一轉語は尊公の下したのではあるまい、誰に教はつたか」と詰問した、僧止むを得ず「實は園頭の静和尚が作つたのです」と答へると、洛浦は感嘆して大衆を集めて口宣した。

「園頭を輕んずること莫れ他日一城隍に位して五百人常に隨はん」

果せるかな、静和尚後に永安禪苑に住して會下轉まるもの常に五百を下らなかつたといふ。

「世豈に予を妨ぐるアルプスあらんや」と喝破した古英雄も、時利あらずして一敗地に塗れたけれども、流水の如く野雲に似たる自由無碍の活作用を得たものには、向ふ處敵なく、行く處何の妨ぐるものもない、四面山を以つて圍まるゝも、閻黎若し辭し去らんとすれば十方通暢、毫も躊躇するを要せぬ、洛浦下の一閻黎は、蓋し言句の閑葛藤の爲に身心を繫縛せられて遂に静和尚を煩はすに到つたのであらう。

### 龍山の庵居

洞山良价禪師が嘗て密師伯と同道して山奥に分け入つた、溪流を涉らうとすると上から一莖の菜葉が流れて來た、洞山は

「菜の葉の流れて來る所を見ると此の上には定めし人が住んで居るであらう、斯様な深山に人家のあるとは奇特なことぢや」

といつて溪流に沿つて遡るときゝやかな庵があつて一人の修行者が打坐して居る、龍山といふ人である、龍山和尚は洞山等の來たのを見て云つた。



「此の山に路なし、聞黎甚摩の處に向つて来る」

洞山「路無きことは且く置く、和尚何れよりか入る」

龍山「我曾て雲水より來らず」

洞山「和尚此の山に住する多少時ぞや」

龍山「春秋に涉らず」

洞山「和尚先つ住するか此の山先つ住するか」

龍山「知らず」

洞山「甚麼としてか知らざる」

龍山「我人天の爲にして來らず」

洞山「茲に到つて語を改めて問ふた、

「如何なるか是れ賓中の主」

龍山「長年戸を出でず」

洞山「如何なるか是れ主中の賓」

龍山「青山白雲を覆ふ」

洞山「賓主相去ること幾何ぞ」

龍山「長江水止の波」

洞山「賓主相見何の言説かある」

龍山「清風白月を拂ふ」

洞山更に語を轉じて問ふた

「庵主箇の甚麼の道理を見てか便ち此の山に住す」

龍山「我兩箇の泥牛闘つて海に入るを見る、直に如今に至つて消息なし」

これ沒蹤跡斷消息の境界を道破したのである、龍山和尚は更に一頷を示した、

「三間の茅屋從來住す、一道の神光萬境閑なり、是非を把り來つて我を辨するこ

と莫れ、浮世の穿鑿相干らず」

是非善惡、愛憎恩怨等の萬境を絶して、静閑幽邃な境地に、洞山密師伯等が來て浮

生の穿鑿をした爲に、折角の淨境が穢されたといふので、龍山和尚は火を放つて庵

を焼き、別の庵に移り住んだ。

## 王道と佛道

徳山先禪師に或僧が問ふた、

「王道と佛道とはどれ程相違がありますか」

國を治むると身を修むるとどう異ふかといふ問である、徳山曰く

「それは恰ど雲が出れば雨が降り、水が流れると波が起る様なものぢや」

二者相回互するものであつて、王道あれば佛道現じ、佛道あれば王道よく行はれるといふものぢやといふ意味であるけれども未證據の僧には何のことやらサツパリ解らなかつたと見えて

「拙僧には一向解りません、どういふ意味でありますか」

と問ふた、佛法上のことは幾何の證明や代數の運算の様にキチンチャンと説明の出来るものではない、されば徳山は僧の再問に對して

「水流れて海に歸し、人は十峰に臥す」

と一層向上邊から答へた、王法の外に佛法なく、佛法の外に王法なき所以を、これも努めて卑近に説いたのである、所謂兒を憐んで酬を忘じた慈悲落草の説法であるが此の僧果して呑み込めたかどうか、頗る怪しいものである、僧は更に

「然らば其の道とは如何なるものでありますか」

と問ふた、佛道といひ王道といふからには國道や縣道といふ様な一定の筋道でもあるのかと妄想して居るのである、徳山は相變らず鋭い太刀先で手もなくあしらつて

「蕩々として際限なく廣いもので、盡法界道ならざる處はない、されば彼處か處かと尋ね廻るまでもなく、縦横自在、意のままに歩いて而かも大道を踏み外す様なことはない」

といふ、道は遠きにあらず、脚下是れ黄金の地である、縣道も國道も、王道も佛道も水流れて海に歸するが如く、總てこれ長安の大道に連續して一切無差別である、然るに凡夫の小智小見を以つて王道と佛道と相距ること幾何ぞなどといふ妄想を引き起す

のである。

### 惡辣無比の禪機

定上座が嘗て鎮州に居つた頃、三人の僧と共に在家の齋に招かれて行つた歸りに橋の上で休んだ、下には溪流が滔々と岩に激し石を嚙んですさまじい勢で流れて居る、一人の僧がそれを見て

「どうだ此の禪河の深さを度ることの出来るものがあるか」と溪流を禪的悟道の境界に喩へて其深淺を度ることが出来るかと、如何にも巧い問題を提起したのを誇りげに左右を顧た、すると定上座はイキナリ其の僧を引捉へて真逆様に溪の中へ投げ込まうとした、他の二人の僧は大に驚いて兩方からそれを止めた。

「休ね休ね、伊上座に觸忤す、且く伊を放せ」といつたとあるから平身低頭して僧の爲に詫をいつたものと見える、定上座は畏しい權幕で件の僧を睨み付けて

「お前達が居なければ此の坊主河の中へ叩き込んでくれる所であつた」

といった、定上座は全體何を其の様に怒つたのか、僧が悟を水の深さに喩へたのも甚しい妄見であつて確かに三十棒に價するが、定上座の眞意は一僧のみならず盡十方法界の一切萬有を溪底へ叩き込むにあつた、而して洞然たる大虚空の中に自由無碍の活機用を現する、これが橋上に於ける一場の葛藤を引き出した目的であつたのだ。

### 芥子に須彌を納る

江州の刺史李渤が歸宗和尚に問ふた、

「經の中に芥子に須彌を納れるといふことがあるが、そんな馬鹿氣たことは信ぜられぬ様に思ひまするが如何でありますか」

昔は支那の役人は皆學者であつたから佛書にも通じて居つた、殊に李刺史等は佛法上の見識も相當に養つて居つた人であるから芥子に須彌を納れるといふ比喻位は充分に解つて居つたに相違ない、百も二百も承知で居ながら空惚けて問ふて來るものがあ

るから師家も却々油断がならぬ、併し歸宗和尚は流石に馬祖門下の俊才と稱せられた大宗師家であるから一見辨見に忽ち刺史の眞意を見抜いて、賊馬に乗つて賊を逐ふといふ作略を用ひた。

「噂に聞けば貴殿は大層な學者で、萬卷の書を讀破せられたといふことであるが眞實でござるか」

と何氣なく畏を掛けた、すると李刺史は浮乎それに引掛つて

「ハイ、大いに讀書は致しました」

といふ、歸宗は

「左様か、見受る所貴殿の身體は餘り大きい方でもない、足の爪先から頭のギリぐまででせいぐ椰子の大きさ位ぢや、其の身體へどうして萬卷の書物が這入りますかナ」

とやられて道がの李刺史一言の返答も出來ず、

「李俛首するのみ」

とある、大小を超越した文句を大小の見を以つて解釋しやうとするのは、恰も方木を圓竅に入れんとする様なものぢや、大學者もこれには氣が附かなかつたと見える。

### 中心の樹子

歸宗和尚に就いては斯いふ話もある、或日歸宗座下の雲衲が作務に従事して居つたのを見て歸宗が維那に「何をするか」と問ふた、維那が

「石を拽きます」

と答へると歸宗は

「石を洩くならば洩くが可い、併し中心の樹子を動かさぬ様にして貫いたいものぢや」

といふた、人々皆中心の樹子がある、猥に動さずんば幸甚である。

### 水牯牛の入浴

趙州從諗禪師が南泉山で修行して居つた時のことである、趙州が浴室の裏を辿りかゝると浴頭即ち風呂係の坊さんが火を焚いて居るのを見て

「何をすのた」

と問ふと浴頭は解り切つたことを聞く男だといひたげに

「風呂をわかすのです」

といふ、趙州は

「湧いたら水牯牛を喚んで浴びさせるが可い」

と教へた、昔でも矢張師家や長上のことを雲衲等が種々と綽名で呼んだものと見え、水牯牛とは南泉山主普願禪師を暗に指したのである。

日暮方になつて浴頭がノコノコと方丈へやつて來た。南泉が

「何か用か」

と問ふと此の浴頭餘程漂輕者であつたと見えて南泉に向つて

「水牯牛をつれて行つて湯を浴びせやうと思ひます」

といつた、南泉もさるもの、こりや趙州か誰かの入智慧ちやナと思つたから

「それでは繩を持つて來たであらうの」

といはれて、付焼刃は得て剝がれ易いもの、浴頭何とも二の句が繼げず、鳩が豆鐵砲を喰つた様な顔をして居る。

其の場はそれで濟んだが、後で趙州が南泉和尚の前へ行くと南泉は先刻浴頭が來て斯様而々であつたと談した、趙州は

「拙僧ならオメ〜と引込みはしませぬ」

といふ、南泉が前と同じく

「繩を持つて來たか」

と問ふと趙州はイキナリ飛びかゝつて南泉の鼻を引捻ぢつた、南泉は痛さを堪へて満足さうに

「それで可い、それで可い、然しまだ手許が危つかしい、最少し手際よくやつて欲しいものぢや」

と、一揚一抑、作家の手腕を表して自由に學人を提擧した、此の父にして此の子あり趙州の作略も又師に譲らぬ立派なものであつた。

佛法僧に就て求めず

黄檗希運禪師がまた修行時代のことである、鹽官齋安國師の會下に居つて首座に任ぜられた、其の頃は唐の宣宗がまだ位に即かぬ以前で、甥の武宗の爲に逐はれて僧となり、香嚴和尚に就いて得度して矢張鹽官の會下に書記の役を興つて居られた、首座と書記とは僧堂の單が並んで居るので、宣宗と黄檗との間には親しい交があつたことと察せられる、或時首座の希運和尚が佛殿に於いて禮拜して居るのを見て、書記は「眞如は元來他に就いて求むべきものではない、佛に就いても法に就いても、將た又僧に就いても求むることは出来ぬ、所謂門より入るものは家珍であらずと聞いて居りますが、長老は何の爲に佛を禮拜せられまするか」と問ふた、黄檗の隙をねらつて一本巧に打ち込んだつもりで宣宗甚だ得意満面の様子が

が見える、黄檗は

「佛に就いて求めず、法に就いて求めず、僧に就いて求めず、而かも常に衲は斯の如く禮拜する、妄想してはなりませぬぞ」

といつてピシヤリと書記に一掌を與へた、黄檗は生死を厭はず涅槃を求めず、迷とも悟とも思はずして任運に禮拜するのである、従つて其の禮拜には毫も求め心はない、然るに書記は黄檗の禮拜を作佛を求め開發悟道を欣ぶの所行であると妄想して此の質問を起したのであるが、一掌を蒙つて大いに驚いた。

「大麤生」

手荒なことをする人ちやと書記が怨訴すると黄檗は

「這裏是れ什麼の所在ぞ、細と説き麤と説く」

細だの粗だのといふて居る時節ではない、禮拜の端的を如實に會得することが肝要ぢや、外所見をして居つては駄目ぢやぞといふて黄檗は又一掌を與へた、佛道修行の上には貴賤親疎の別はない、黄檗は書記が武宗宣帝の叔父に當る金枝玉葉のやんごと

なき方であるといふことは承知して居るが、止むに止まれぬ老婆親切から此の一章を  
與へたのである。

後に此の書記は武宗の後を承けて帝位に登つて宣宗と稱し、黄檗を羅行の沙門とい  
ふて厚く崇敬せられたといふ、武帝は會昌沙汰の時に佛法を甚く迫害した人である。

### 誠拙和尚と五百兩

誠拙和尚は鎌倉圓覺寺の中興の祖として近頃大用國師と證せられた人であるが、三  
門を建立する爲にて弘く寄進を募つた時、梅津清兵衛といふ人が五百兩の金子を持參  
して寄進を申し出た。

「和尚様は此の度三門を修繕致さるゝ由承りましたから私も五百兩丈寄進致し  
たいと思つて持參致しました」

と傳兵衛が言つたが誠拙和尚は只

「あゝそうか」

といつた儘有難さうな様子もせぬ、昔の五百兩といへば頗る多額な金であるから、如  
何に金満家の清兵衛も大奮發をしたつもりであるが和尚が一向驚いた様子も嬉しさう  
な様子もせぬので、或は意味が通じなかつたので清兵衛は改めて

「和尚様、些少でございますが建築費の中へ五百兩だけ寄進を致したいと思ひま  
す」

といふたが誠拙和尚矢張

「あゝそうか」

といふばかりで一向手應へがない、清兵衛遂に堪へ兼ねて憤然として色をなして、如  
何に僧侶は寄進によつて生活するものであるからといふてもこれ程の莫大な金子を寄  
進するものに對して謝禮一口言はぬとは餘りであると思つたので

「五百兩と一口に申しますが他人は知らぬこと手前共商人に取つては少からぬ  
金子であります、それを寄進をしようといふには随分人知れぬ苦心も致しまし  
た、就いては何とか一言の御挨拶位はあつて然るべきかと思ひます」

といふた、誠拙和尚は初めて清兵衛の方を向いて

「其方は禮が言つて欲しいのか」

「まあ左様でございます」

「馬鹿なことを言ひなさい、其方が善根功德を積むのに俺が禮をいはねばならぬといふ法はない」

と言つた、達磨大師は梁の武帝が寺を建て僧を供養した功德を問ふた時「無功德」と答へられた、梁の武帝も梅津清兵衛も、まだ有所得の心が脱けぬから、折角の善根も却つて無功德となつたのである、寺を建て僧を供養することのみではなく、折角の善根も切の事、有所得の心に捉はれては眞に其の効果を擧げることが出来ぬ。

### 孫楚の禪機

禪機と頓智とは似て非なるものであるが、頓智も其の尤なるものは之を禪機といふことが出来ぬでもない。

支那に孫楚といふものがあつた、隱栖の志を起して友人の王濟に向つて

「石に漱ぎ流に枕しやうと思ふ」

と言つた、すると王濟は聞き答めて

「流に枕したり石で漱ぐことが出来るかな」

と擲揄した、孫楚は昔許由が石を枕とし流に漱がんと欲す」と言ふた語を誤つて反對に言つたのでたつたが、負け嫌ひの男であつたので、早速詭辯を弄して

「流に枕しやうと言つたのは耳を洗はうと思つたからだ、石に漱がうと言つたのは齒を厲かうと思つたからだ」

と巧に言ひ抜けた、禪門では流水上に毬子を打するともいひ、強翁酒を飲んで李翁醉ふともいふ、孫楚若し禪を會して居つたならば斯様な辯解は試みなかつたであらう。

### 趙州と保壽

趙州和尚が保壽和尚を訪ふたことがあつた、保壽は趙州の姿をチラリと見ると早速



壁の方を向いて坐禪をして相手にならぬ、併し趙州は別に困つた様子もせず、直ちに坐具を展べて禮拜しやうとした、師を訪ふて法を聞かんとするものは必ず展坐具せねばならぬ、趙州は保壽の態度如何に拘らず自分の爲すべき禮をなしたのである、昔大梅和尚が馬祖から即心即佛といふことを教はつて、山間に入つて打坐三昧に日を送つて居た時、馬祖の座下の一人が行つて近頃は馬祖は非心非佛と説いてござるといつたが、大梅は他は遮莫我は只管に即心即佛といふたといふ故事があるが、趙州も矢張他は遮莫我は只管に坐具三拜といふ機用を示したのである、然るに保壽は趙州が三拜せぬ先にサツサと立つて方丈に歸つて終つた、趙州も亦それを見ると坐具を疊んで保壽の下を立ち去つた、斯様に一言一句を費さずして佛法的々の意旨を現前した兩師家の作略は實に後人の範とすべきものである、由來禪門では轉身の働を尙ぶ、甲といへば甲に執着し、乙を示せば乙を珍重するものは、或は甲の陷窞に墮ち或は乙の窞窟に陥つて自由の働が無い、轉身の妙用あるものは、これ等の陷窞窟に遇つても忽ちにして出身の活路を開く、趙州の展坐具も收坐具も、保壽の背面して坐したのも方丈に

歸つたのも、畢竟轉身の手段である、轉身の働は殊に處世の上必要である、學者は往々にして學に没頭して却つて眞理を失却し、政治家は自己の意見に捉はれて却つて適宜の處置を誤る、轉身の妙用あつて即今何の時節ぞと退身三步する時、其處に出身の活路は開けて臨機應變の作略をなすことが出来るのである、此の一則、正に好箇轉身の模範である。

### 喝の重さ幾何

蘇東坡が未だ大事を了畢せぬ以前のことである、玉泉の皓禪師を訪ふと、禪師は「貴官の名は何と申さるゝか」と早速探り棒を入れた、東坡は

「秤と申します」

といふ、天下の名僧智識を秤にかけるといふ意を寓したのである、東坡は巧に禪師の打ち込んで来た太刀先を外したつもりで居ると、禪師は

「喝!!」

と一聲高く怒鳴つて置いて

「此の一喝の重さは幾何あるか」

と第二問を發した、前箭は尙ほ軽く後箭は深しである、東坡茲に於いて一言も應酬することが出来ぬ、第一問では辛うじて身を以つて免れたが、第二問に逢つて出身の活路を開き得ず、所謂句下に死在して終つたのである、東坡が發奮して熱心に參究する様になつたのはこれ以來のことであつた。

### 心を制禦せよ

夢窓國師疎石が其の道譽未だ廣く世に知られず、田舎の小寺院に住せられた時、甚だ諍鬪を好むものがあつて自らも其の性癖を厭ひ、疎石和尚の處へ來てそれを退治する方法を尋ねた、和尚は之に答へて

「諍鬪の基を絶つことが肝要である、世間に戰をよくする人は先づ敵の大將を

目にかけて木葉武者等は眼中に置かぬ、汝の心に背く敵の中で何れが大將であるかといふことを先づ見定めよ、諍鬪を起すものは瞋恚の心であるから、初一念の瞋恚を退治すれば餘の雜念は從つて滅びる、諍鬪は墮獄の因ではない、瞋恚の心を實に人の善根を焼き盡して地獄に墮せしむるものである、他に對して諍鬪の念の生せんとした時、内に向つて自らの心を制禦せよ、これ、諍鬪を滅す良法である」

と訓したといふ、言極めて平凡に似て而かも最も實際に適した教訓である、禪僧の説く處往々にして奇矯に走ることがあるが、それが必しも禪僧の眞面目ではない、諍々たる挖泥帶水の談も又佛祖正傳の大法であることを知らねばならぬ。

### 雲居和尚の禪機

雲居和尚は何處の人で何人に法を嗣いだか不明であるけれども、元和の頃攝津の勝尾寺に寓して居つた、人となり恬淡高潔で坐榻の外何物も坐右に備へなかつたといふ

仙臺侯が其の道譽を聞いて之を松島の瑞巖寺に請せんとして太夫片倉小十郎を遣はして之を迎へしめた、雲居は

「來いとあれば往くが、數日間待つて貰ひたい」といふ、片倉が理由を尋ねると

「先日一箇の釜を買つたが其の代金を拂ふ爲に托鉢をしやうと思ふ」と答へたので、片倉は深く其の慮心に敬服したといふ、其の釜は永く勝尾寺の什物として残つて居つた。

徳川三代將軍家光公が鷹狩の砌品川東海寺に立寄つて晝餐を喫した後、廊下に立つて海上を眺めて居る處へ二人の小僧が來たので戯れて沖の方を指して

「あの帆かけ船を此處から急に止めて見よ」といふた、すると一人の小僧は立つて障子を閉ぢた、他の一人は坐つたまゝ兩眼を閉ぢた、家光公は殊の外兩人の智慧を賞讃したが、殊に兩眼を閉ぢた小僧の一人勝れた機略に感じたといふ、其の小僧こそ後の雲居和尚であつた。

## 陸旦大夫の石

南泉和尚は斬猫の話で有名な作家である、曾て陸旦大夫が問ふた

「私の邸に石が一つあります、それが時々臥たり起きたりします、此奴を一番刻んで佛としやうと思ひますが如何でありますか」

人々本具の石は臥たり起きたりするばかりではない、飯も食べれば糞もひり、讀書もすれば遊山もする、石屋の手を借りないでも已に立派な佛様である、併し乍ら修せずんば顯はれず證せざるには得ること無しであるから、陸旦大夫は果して此石が佛になるかを問ふたのである、南泉和尚は手輕に

「出來るとも出來るとも、そんなことは譯も無いことぢや」と答へられた、一切衆生悉有佛性、草木國土悉皆成佛であるから一頑石と雖も刻んで佛と爲すことは難しいことではない、陸旦大夫はそれでも尙ほ安心が出來なかつたので更に

「石は何處までも石ではありませんか、雀が海中に入つて蛤蜊となつても、石が佛となるといふ様なことは無いと思ひまするが」と問ふた、すると南泉は

「そうぢや、石を佛にすることは出来ぬ」

と答へた、前には出来るといひ今度は出来ぬといふ、所謂一手擡一手捺の作略である鶴の首長しと雖も鴨の足の短きに代へることは出来ぬ、櫻には梅の薫なく、柳には櫻の色を求めるとは出来ぬ、石は石、佛は佛、箇々獨立無伴なる趣を示された、出来ると肯定したのは向下底の消息である、出来ぬと否定したのは向上底の端的である、前には放行して一切を是認し、後には把住して一切を非認した、これ學人をして半面の道理に執着して他の半面を失却せしめざらんが爲である。

徳化の力

或夜楚の莊王が群臣を集めて酒筵を開いた、酒酣なる時、一陣の夜風が颯と吹き

込んで燈が皆一齊に消えた、一座には多數の美人が侍つて居つたが、中に何人か一人の袖を引いたものがあつたと見え、美人は怒つて其の者の冠の纓を引き切つて、王に請ふて燈を點けて其の者を視させやうとした、然るに王は

「酒を飲めば冗談をするのは世間有り勝の事である、酒を勸めて置いて少しばかりの事を荒立て、士を恥しめる様なことがどうして出来やう」

と思つて斯様に左右に告げられた、

「今日寡人と此の場に飲みながら冠纓を絶たぬ様なものは、此の酒宴を有難く思はぬものである」

と、茲に於いて坐に召された多勢の臣下は皆其の冠纓を絶つた、燈を點してから先に美人に戯れたものは何人であつたか解らなかつた。

後、楚と晋とが戦端を開いた時、一人の武士が常に莊王の前に立塞つて敵を防ぎ、五度戦つて五たび首級を得て遂に敵を却けた、其の勇士は誰のらう襲に酒宴の席上で衆人稠坐の中で辱めを蒙らんとして莊王の爲に助けられた某といふ士であつた。

宗 祇 の 髻

連歌師宗祇は禪味を帯びた風流人であつた、曾て夜中に山道を歩いて居つて賊に會つた、財物を悉く奪ひ取られたが別に氣に止める様子もなく、山を下らうとするとまだ泥棒が従いて来る、宗祇は

「また何か要るのか」

といふと賊は、

「お前の髻は大層いゝ髻ぢや、それを貰つて拂子の毛にしやうと思ふ」

といふと宗祇は命よりも大切と思ふ程に朝晩手人をした髻を取られることは如何にも辛いので

我が爲に拂子ばかりは免せかし

塵の浮世を捨てはつるまで

と詠じた、賊も宗祇が餘り情氣るのを哀に思つて其の儘立ち去つて終つた、趣味に生

きるものを取つては一本の毛髪と雖も時としては千萬金にも換へ難い價がある。

越 溪 和 尙 の 瞋 拳

越溪和尚は明治初年に於ける濟門の大智識であつた、が、學人を接待する機鋒頗る俊烈で屢人を驚かした、伊達自得居士が曾て相國寺の僧堂で初めて和尚に見ると、例の怒罵瞋拳を亂下せられて大いに立服し、當時心華院に居つた獨園和尚に遇つて大いに不平を訴へた、

「拙者は少壯の頃から徳川從一位侯に仕へたけれども曾て頭に手を掛けられたことはない、又父にも斯様な目に遇ふたことはないのに、越溪和尚は亂暴にも鐵拳を拙者の頭に加へた、如何に佛法上のことには親疎貴賤の別を見ぬとはいへ餘りに不禮である」

と頗る憤慨の様子である、獨園和尚は之を聞いて

「マア其の様に怒らないでよく、越溪の拳固の痛さを味はつて見なさい、拳頭に

力あることが解るから」

と懇に慰めた、自得居士は家に歸つて静かに越溪の怒罵瞋拳に就いて考へた、三晝夜只管に工夫して果然として越溪の活手段の意旨を會得して、爾來誠を傾けて和尚に參究した、

越溪和尚が或時東京の某所で時の大政大臣三條實美公に遇つた、紹介するものが「これが太政大臣三條公であらせられる」

と恭しくいふと、和尚は

「ホ、ウ、あなたが三條公でござるか、布告の尻尾では折々御目に掛るが、面の當り遇ふのは今日が初めぢや」

と云つて哄笑一番、殆ど傍人無きが如くであつたといふ。

須らく劍を揮ふべし

夾山善會和尚に一僧が問ふた

「塵を拂つて佛を見る時如何」

妄想煩惱の塵を拂つて眞如法性の姿を見た時の様子如何と問ふたのである、夾山答へて曰く

「直ちに須らく劍を揮ふべし、若し劍を揮はずんば漁父巢に棲まん」

佛の一字も心田の汚れである、神鼎煙和尚は僧が「撥塵見佛の時如何」と問ふたのに答へて「佛も亦是れ塵」といふたが、實に眞如といひ法性といふも又明鏡臺上の塵であるから、劍を揮つて斷盡すべきである、塵を拂つて現はるゝが如きは是れ眞佛ではない、經にも

「若し色を以つて我を見、音聲を以つて我を求めば是の人邪道を行す、如來を見るること能はず」

とある、これ凡て爲作造作に涉つて見佛せんとするも遂に徒勞に屬すべきをいふたのである、若し塵を拂つて佛を見て之に執着する時は、恰も漁士が船を蘆荻の叢の中にこぎ入れて、出ること入ることも出來ぬ様になつたと同じく、全く自由を失つて終

ふ、（やま）夾山は之を若し劍を揮はずんば漁父巢に棲まんと示されたのである、宇宙がどうの人生が斯うのと妄想分別して居る輩は畢竟蘆荻の中に迷つて居る漁父の仲間である。

どうして悟るか終

大正八年十一月廿一日印刷  
大正八年十一月廿一日發行

二十五

定價金壹圓四拾錢

著者 池上文僊

不許複製

發行者 今井助松  
發行所 東京市神田區駿河臺西紅梅町六番地  
著者 松彦太郎  
印刷者 古川健作  
印刷所 東京市京橋區本八丁堀四丁目五番地

發兌元

東京市神田區駿河臺  
西紅梅町六番地

日本禪書刊行會

禪畫洞池上文僊先生筆 高貴雅裝四六倍版頗美本

達磨揮毫家の好手本

一畫達摩百圖

全版コロタイプ  
定價金四十圓  
送料金拾貳錢

本書は池上畫伯が其の得意の靈筆を揮ひ菩提達磨壹百種を圖し是に七大禪師の題贊を  
加へられし物にして古今東西未だ嘗て斯の如き珍書無し禪を修め畫を愛するの人必ず  
一本を座右に備へられよ題贊の禪師左の如し

- ▲曹洞宗總持寺貫主 石川素童禪師
- ▲臨濟宗建仁寺派管長 竹田默雷禪師
- ▲臨濟宗圓覺寺派管長 菅原宗演禪師
- ▲臨濟宗建長寺派管長 菅原時保禪師
- ▲曹洞宗永平寺派貫主 高津柏樹禪師
- ▲南 榮 天 宗 管 長 中原鄧州禪師
- ▲曹洞宗永平寺派貫主 故森田悟由禪師
- ▲田中舍身居士

教界の大異人藤岡了空老師著 四六版頗美本(好評嘖々如湧)

重版 修養漫畫 氣隨氣儘

定價金壹圓  
送料六錢

病魔養生哲學

定價一圓四十錢  
送料六錢

本書は貳拾餘年間實地の養病に努め天壽既に十餘歳を延長せられし老師の實驗著述に  
して洵に古今稀有の珍書なり肺患其他病疾に悩む人は是非御一讀あれ必ず養生の秘訣を  
悟り得ん

發兌元

東京市神田區  
駿河臺西紅梅町六番地

日本禪書刊行會

振替東京四六三四〇番



392  
53

9.4.24

終